

R. ムシルの戦争体験 ——飛箭の体験を中心として——

加 藤 二 郎

R. ムシルの作品を読むと、そこに共通に見られるものは、ムシルの分身であるその時々主人公が、空虚な日常生活ではなく、遠いもの、別のものを常に期待して恐れ、冒険的にこれに身を挺する用意があることである。彼らは、狂気に陥ることなく、清澄さの中で体験できる、論証的な生きる可能性を探索する。もっと濃厚で、もっと意味があり、もっと重要な生を、実験的（冒険的）に探し求める。無意味な生活から価値ある生へと反転するとき、言葉の絶えた瞬間への恐れ、人間がそこで自己の中心点となり、もう生の周辺にはいないのを感じて、自己自身にたち帰る瞬間——私はかつて「R. ムシルの『ヴァレリー体験⁽²⁾』」で、ムシルがこの初恋体験を核として、出発点として、この目には見えぬが、しかし存在する神秘的な瞬間の意識内容を、正確に言語化してゆくその生涯の努力の過程を明らかにしようとした。

本稿でも扱ふムシルの飛箭の体験も、「ヴァレリー体験」と同様に、目には見えぬが、明らかに存在する神秘的な瞬間の体験である。これは、日常的な正常な状態での経験に比べれば、瞬間的に消える詩的状态である。だが、このようにはかない体験の堅固な言語化こそ、ムシルの倫理的、文学的使命だったのである。なぜなら、このような神秘的な「別の状態⁽³⁾」を排除することにより、安定した支配的勢力を形成している、最も疑わしい諸価値からなる現実に対して、この現実⁽⁴⁾にふと割りこんでくるが、すぐ消えてしまう、はかない「別の半分、今は失われた神の子の状態」、「再三再四確かな地位を得んと努めてきたが、抑圧されているこの人間の半分」の存在を顕在化することにより、はじめて人間の全体像が得られるにちがいないと、ムシルは確信していたからに他ならない。

飛箭の話は、周知のとおり、作品『黒つぐみ』(Die Amsel, 1928 年)の三つの話のうちの第二話として語られている。だがこれは、第一次大戦中に体験されて、その

日に日記に記入されたものを核とするものだ。35歳のムシルが、いつ死ぬるかわからぬ戦場で、全身全霊をこめてこれを受けとめ、死中にあって生に蘇るといった体験であり、彼自身が言うように「大いなる出来事」(ein großes Ereignis)⁽⁵⁾だったのであり、従って、「年を取らずに、その本質の全層をしっかりと保持して」記憶に残り、13年後に『黒つぐみ』の中で蘇ったのである。「ヴァレリー体験」を、平和時に白昼に露呈した神秘的な愛の実存的体験と言ってよければ、飛箭のそれは、戦場で白昼に露呈した神秘的な死の実存的体験と言い得よう。またここで、『善の研究』からの引用を許されるならば、この両体験はともに、「偽我を殺して、死してのち蘇る。このようにして始めて真の主客合一の境に到る」⁽⁷⁾の体験と合致するものであり、西田が「宗教道德美術の極意」と言っているものに相当しよう。

さて、飛箭の体験をした当時、ムシルはこれが後年『黒つぐみ』の重大要素になるなど、夢にも考えていなかった。なぜなら、『黒つぐみ』の構想は、1924年の母ヘルミーネの病気の報せと、それに次ぐ彼女の死去をめぐる息子ローベルトの体験をまわって、始めて生れたものに違いないのだから。当時のムシルは——A. ダイガーの『黒つぐみ研究』(1974年)、新版のムシルの『日記』二巻⁽⁹⁾(1976年)により、以前に増して明らかになったことだが——彼が飛箭の体験をした1915年あるいはその翌年に、この体験を『一兵士が語る』(Ein Soldat erzählt)という表題で、直ちに一つの物語として作品にしようとしたのである。いや、そればかりでなくこの草稿を、同じ頃に計画したと推定される『死の歌。歌っている死』(Der Gesang des Todes. Der singende Tod)という表題の草稿と、その続きと見られる無題の草稿と纏めて、一つの作品としようとする節がないでもないのである。だが、この三つの草稿については後で述べることとして、1914年夏の大戦勃発当時の、ムシルのアムビヴァレントな戦争肯定の気持から、本稿を進めたいと思う。

ムシルは、戦争勃発とともに、オーストリア国民が一度にどっと連帯意識に目覚めて、「奇妙な、宗教的なものにも近い興奮」⁽¹⁰⁾状態にあるのを経験して、戦争は共同体意識を、国民の合一を、呼び覚ますものだを知るにいたる。一方ではこの興奮を病的とみなしながらも、これを肯定して、「今や死はもはや恐怖ではない。生きる目的なぞ誘惑とはならぬ。死なねばならない者、また所有物を犠牲に供する者は、生を受け、そしてゆたかになる」⁽¹¹⁾なぞと、雑誌で語る。そして戦後、開戦時を回顧して、「始めはどもりがちに言われ、後には空文句に墮してしまった、戦争は一つの宗教的体験だったという言葉は、全く正しかった」⁽¹²⁾と日記に記している。開戦直後人づてに、兵営内

の無秩序ぶり、盗みの話を聞いて、日記にしかと書きとめてはいるが、ムシルはこのオーストリア国民の共同体意識の出現、その昂揚状態を、ユートピアの出現と感じたのだ。ムシルは8月に直ちに召集を受け、国民が抱いた昂揚状態を、おそらく全く個人的なものとして保持しながら、翌15年2月には南チロルの国民軍歩兵大隊196に副官として配属される。当時オーストリア領であった北イタリアのトリエント、その少し東寄りにあるベルギーの近郊にあるレビコに、部隊はあった。この地方は、2000 m 級のドロミテの連山が、裸岩を晒して地底から抜け出す奇怪な景観を展開し、人間の日常の見方や思考をふと消し去る魔力を、自然は十二分に備えている。またその山腹には、可憐な高山植物が夏には咲き乱れ、牧草地はそのまま童話のお花畑に変身していて、ここも人間の意識の座標軸を、忽ちにして反転させる自然の魔力が、明るく静かに住まいしている。昔の人なら、妖精がいると言っただろう。

レビコはレビコ湖畔にあり、この湖と隣のカルデナッツォ湖の間に、ムシルが飛箭の飛来を体験した、小高いテンナ (Tenna) の丘陵が、細長く伸びている。今はイタリア領の風光明媚な静かな保養地であるこの地帯は、スガナ谷 (Suganatal, Val Sugana) がここから平たく西へと広がる玄関口となっているが、当時はここがオーストリア軍の最前線で、この谷を挟んで北側の山岳にはオーストリア軍が、南側の山岳にはイタリア軍が対峙して、砲撃戦を繰り返し、両軍ともに犠牲者を出したところである。近代戦の特徴とも言える、見えざる敵(砲弾)による闘いだった。

「戦争の非合理と不条理。実存の問題の突発的露呈。戦争が長すぎて、それを覚えていられなかったのを、私は嘆いてはいない……私自身からも、それはまもなく消えてしまった。なぜか。一人で、死、見えざる敵、自然とともにあるときにのみ、実存の問題の露呈はあったのだから」と、先に引用した「戦争は一つの宗教的体験だった」⁽¹³⁾という記入と並べて、ムシルは戦後に日記に記入している。この二つの回想は併記されているが、明らかにそれぞれ別の問題を提示している。前者は、国家社会的な共同体の宗教的昂揚体験を示し、後者は実存の、つまり個人の生死や精神の昂揚などを問題とするものだ。しかし日記の文章は、たじろがぬ明るい眼差しで、敵・味方⁽¹⁴⁾といった感情のまるでない、「中立的な感情」(ein neutrales Gefühl) で書かれている。ムシルは副官として、冷静沈着に行動し、軍務を着実に果たした実績を認められているが、⁽¹⁵⁾記された日記は、戦争の危険など忘れたかのように、童話的に、あるいは牧歌的に、日々の事件を扱っているところが多い。その日記から、「実存の問題の露呈」を二、三引用してみる。

戦争は、「見えざる敵、死」との闘いであった。飛箭もその一つとなるが、頭上を飛び交う彼我の砲弾、この見えざる敵に対して、もっぱら聴覚で対応する記述が、日記の随所に見られる。それらの音を総括して、詩人は、「ここでは死が歌っている（歌っている死）」と、定着する。戦争を、不確実な死を、歌うという言葉と連関づけて、かく定着したことで、詩人自身もいわば歌う空間を得た思いではなかったろうか、死の歌の下で。「それは、私たちの頭上で、低く高く歌っている。砲弾を音で識別する。チュ・イ・ルー・オー・ブム。近くに落ちるときには、チュ・シュ・バムだ。一、二度短かくシューといって、お前に跳びかかる。この歌やシューの音には、アフリカの密林を思わせるところがある。ハチドリ⁽¹⁶⁾の羽ばたきや、大きなネコ属たちの跳びかかるのを、身のまわりに感ずる⁽¹⁶⁾」。そしてこのような危険の中を、たとえば朝方「なんの理由もなく」散歩に出る。「一步毎が一種の克己を必要とする」。だがこれを続けて克服してゆくと、幸福感に溢れてくる。「死が全く個人的なものとなる。お前は死を頭で考えるのではなく、——はじめて——全身で感ずるのだ。戦争におけるこの意志的なものの先行には、平和の甘受にくらべれば、ささやかな快適さがある（平和時には意志は、金とか研究とかの非個人的なものに向けられるが、戦争では両足の動き⁽¹⁶⁾に向けられる。お前と緊密に結びついた絶えざる決断⁽¹⁶⁾」）。ばかりしい、今更なんでこんなことを日記に書くのか、と思われるかもしれない。だがムシルはむしろ大真面目で書いているのだ。そしてここに、彼の戦争に対する本音が出ていると思われる。終戦もま近な頃にかかれた断片に、なぜ戦争をするに至ったかと自問して、「われわれは平和に飽きてしまっていたからだ」と、自答している。「1914年の人間は、文字通り死ぬほど退屈していた！ それゆえ戦争は、冒険に向かう興奮（Rausch）、遠い未発見の海辺の輝きとなって、彼らを見舞ったのだ。それゆえ信仰のなかった者たちは、戦争を宗教的体験と言い、孤独の殻に閉じこもっていた者たちは、戦争を合一の⁽¹⁷⁾（einigend）体験と名づけたのだ」。また1921年のエッセイでは、あの開戦時の「爆発的な昂揚状態は……市民生活への拒否であり、古い秩序よりもむしろ無秩序への意志であり、冒険への飛躍であった……戦争は平和からの逃避であった⁽¹⁸⁾」と書いている。ムシルはここで開戦時の一般市民の集団心理または病理を診断しているに違いないが、彼個人について語っていると診断しても差し支えない。ぜいたくな話だが、長く続いた平和に飽き、合理化し、画一化した市民生活に対してうっ屈して、もっと濃厚で、もっと意味のある生を常に生きたく思うムシルには、戦争は「冒険に向かう興奮、遠い未発見の海辺の輝き」、「冒険への飛躍」だったのである。ただあれこれ頭で計算して下す決断ではなく、個人的な死は覚悟のうえで、全身全霊で自己の中心から瞬間毎

に下す純個人的な決断、そしてそれにより危機をのり越えたと思ったときの解放感、充実感——ムシルはそれを戦争に求めたと言えよう。そしてこのような危うきところで遊ぶとき、目にする自然は深みを増し、「安定した生活ではけ⁽¹⁹⁾して」見られぬその美しさを、瞬間垣間見させるものらしい。美は危険と、美は狂気と、紙一重のところにあると見える。

また夏のある日の日記には、童話のお花畑と化している牧草地に入りこみ、アネモネ、忘れな草、ラン、リンドウ、スイバの花の咲き乱れる中に埋没する。そして妻のマルタらしい女性 (eine Frau) を遠く慕って、この場所を彼女と合一する (vereinen) 場所と思いなして、宗教的狂気 (eine religiöse Tollheit) と自認しながらも、「神秘的になり始める」。そして「この不可思議な自然の中で」、まもなく倒れ死ぬだろう、と考える。

またある日には、1900 m 級のホダラ・ヴェドラ山を 1000 m の中腹まで登り、ぐったりと疲れて、その窪地にあるベンチに腰をおろした。もう腰はあがらない。「口ももう開かない。呼吸はふだんと異なり、まわりの自然の一要素と化している」。あたりは完全な静寂と孤独が支配し、動くものとてない。ドロミテのこの山岳世界は、「荒涼としていて非人間的で、天地創造の時代」にある。前方にある高い大きな岩山は、赤裸に実存を露呈して、黄色の岩肌を晒している。詩人の視線は、幾度となくその方に投げあげられる。だが、「粉みじんに碎かれて流れ落ちてしまう」のだ。呼吸も自然と融け合い、ふだんと異なっているが、詩人の目も、ふだんの物の見方を打ち碎かれて、主客の弁別は流れ去り、いつしか逆転している。視線の座標軸の急転。ふと詩人の手が、ベンチの寄り掛りからすると落ちる。すると、この大自然の中で、ただ一匹、ベンチの近くで先程から地下網を忙しげに掘っては、時折穴から顔をのぞかせていた小さなネズミが、とめ針の頭ほどの小粒な黒い目を、くると詩人の方に向けた——一瞬、詩人は、今くると動いたのは、その小さな黒い目だったのか、それとも揺がぬ泰山の方だったのか、わからなくなる。⁽²¹⁾

次の例は日記ではないが、同様に前線にいたときに書かれた草稿『死が歌っている。歌っている死』の内容である。ムシルは副官として歩兵部隊に属していたが、歩兵の行なう白兵戦の修羅場を一度も体験したことはなかった。だがこの草稿では、主人公は白兵戦に臨み、敵弾を受けて倒れる。この草稿全体は、戦闘下の人間の営みが、獣のそれとして描かれている。主人公は傷ついた獣のように戦場に置き捨てられる。そして傷病兵として後方に護送されるが、その貨物車の中では、獣用の小桶のような容器から水を飲む。孤独感と屈辱感にむしばまれる。またその貨車の中で寝かされてい

る重傷兵たちは、「獣以下に突き落とされたもの」と形容される。戦争の悲惨さ、無意味さが色濃く描き出された草稿である。

以上の事例は、いずれもムシルにおける戦争のもつ不合理、不条理、実存の問題の露呈を示すものだが、次の飛箭の体験は、個人的に選ばれたものとして死を受けとめ、生死の境を澄んだ興奮 (ein Rausch) 状態のうちで乗り越えることにより、生の全き充実感、より意味がある生を得るという、ムシルのいう「実存の問題の露呈」を顕著に示す例となろう。普通なら、小事件として忘れてしまうような出来事だが、詩人にとっては、一大事件だったのだ。⁽⁵⁾

1915年9月22日、テナナの丘に屯していたムシルたちの頭上に、敵機が一機 (ein Aeroplan) 飛んできた。珍しいことである。ムシルたちは、うっとりしてそれを見ているうちに、それが飛箭を投げ落としたのだ。日記は、見えざる敵に対応して、再び聴覚本位のものになっている。時間にしたら、ほんの10数秒、あるいは数10秒間の出来事だったのではあるまいか。

「テナナで榴散弾か飛箭 (Fliegenpfeil)。それはもう長いこと聞こえている。風のようにビューと鳴る音、あるいは風のようにざわめく音。だんだん強くなる。時間がひどく長くかかるように思われる。突然それは私のま近の地べたに入った。まるで音が吸いこまれるよう。空気の波立ちの記憶は一つもない。突然に音が強まって近づいたという記憶もまるでない。だがそうだったに違いないのだ。なぜなら、本能的に私は上体をさっと脇に寄せ、両足を踏んばったままで、かなり深いお辞儀をしていたのだから。この際恐怖はひとかけらもなく、突然のショックに見舞われた際に不安はなくても普通現われる、あの心臓の鼓動のような純神経性の驚きすらなかった——そのあとで非常に気持のよい感じ。それを体験したという満足感。ある共同体 (eine Gemeinschaft)⁽²²⁾ に迎え入れられ、洗礼 (Taufe) を受けたという誇りに近いもの」

「ある共同体」以下の一行は、前文との脈絡で見ると、ひどく唐突な観がある。だがそれがかえて、この体験がムシルにとって並々ならぬものであったことを物語る。生涯孤独の殻から抜けることのなかったムシルは、共同体、和合、合一、一致ということには、常人の理解を越えた強烈な憧れを抱いていた。彼が「神」と言い、あるいは「宗教的体験」と言う場合、それは即「共同体」、あるいはそれに類する言葉を言っているといってよく、その逆の場合も同様で、これはまた「別の状態」とも言いなおせるものであった。⁽²³⁾ 最後の一行は、唐突とも高飛車とも見てとれるが、彼ひとりがくまなく体験した、言葉にしがたい飛箭事件の全内容を、簡潔に結ぶには、彼にはこ

れで足りたのである。そしてムシルの場合、このように突然強烈に詩人を襲った体験が、短篇の酵母となる。

「突然の、そしてくっきり残った精神的興奮が短篇を生み出す。一流の短篇では、詩人は自らについて語るのではなく、詩人を見舞ったものを、その震撼を、叙するのである……このような体験においては、世界が突如深まる、または詩人の目が突如逆転する (sich umkehren)。このような事例で、詩人は物の真の姿を見ると信ずる。これが短篇小説の体験である⁽²⁴⁾」。飛箭体験の短篇化は、直ちに同じ年かその翌年、南チロルの前線で試みられる。前述したように、表題は『一兵士が語る』で、三つの草稿が残っている。

第一稿⁽²⁵⁾ (以下 M₁ と記す) は、インク書きの草稿で、訂正加筆が随所に見られるもの。第二稿⁽²⁶⁾ は、M₁ の清書として書き始めたものらしいが、直ちに中断しているので、本稿では対象外とする。第三稿⁽²⁷⁾ (M₃ と記す) は、官庁用紙にタイプで清書したもの。ムシルは1916年に『チロル兵隊新聞』の編集員となっているから、そのタイプと用紙を使用して清書したものと思われる。M₁ には、M₁ では飛箭体験をなお十分に表現し得なかったと思われる箇所を補足するために、覚え書風になおかなりの分量の書き足しがある。だがこの部分⁽²⁸⁾ は、M₃ で殆んど消化吸收されている。飛箭の日記の文章は、原文で11行、M₁ で日記のこの内容に照合するところは、原文で約32行、M₃ では約45行である。日記の例の最後の一行に照合するものとしては、M₁ で飛箭の話が出る前に前置きの⁽²⁹⁾ ようにして、「大いなる出来事のために創られたこの風景の中で、私は私の火の洗礼 (Feuer Taufe) を受け、そして見えざる教会 (die unsichtbare Kirche) に迎え入れられた」と、一行入れられているが、M₃ では削られている。「共同体」は、けっして軍隊の共同体などではなく、「見えざる教会」のことであり、見えざる教会とは、目には見えぬが、しかし存在する「別の状態」のことであり、神なき時代の神秘思想の「神」でもあるものだ。次に、M₁ と M₃ の飛箭体験の部分だけを、比較対照する形で訳出する。だが、この Ekstase 体験を予知させるその前の部分について、予め述べておくべきだろう。

夜になると、主人公たちは山岳の陣地から下りて、スガナ谷の真っ只中にある前進陣地へ移動する。もし彼ら (sie, 敵のこと。日記でも、この草稿でも、敵という言葉は一度も使われていない。一度だけ使われるが、Ich liebte dunkel den Feind という箇所だけである) が、こちらの動きを知れば、「石を投げてわれわれを打ち殺すことができたろう。われわれは身動きもできなかった」。だが主人公の私は、体を少

しあげて、鼻を肩越しにまわす。するとその度に、ブレンタ連峯が、ガラスで硬く壁取られたように、幾重にも重なる前山の彼方で、際立って高く、明るい空色をして、聳え立つのが見えた。そしてこういう夜々には、星々は大きく、そして「厚い金紙から打ち抜かれたようで、焼きたてのパンみたいにテラテラと煌いていた。空は夜でも青く、その青空の真っ只中で、純銀に、また純金に、乙女のような細い三日月が、あお向けに横たわり、うっとり泳いでいた」。ムシルのこの星空の描写を読むとその度に、ゴッホがアルルで描いた、あくまでも青い夜空に、幾つも幾つも輝くあの大きな黄色の星々を思い出す。ここには、狂気とか健康とかいう診断を遥かに超えた清澄な精神、深まった透視がある。 M_1 には、「すべてがかくも美しいのは、死と関係しているからだ」というト書きがある。だがどうしてムシルの目には、このような場合に、この美しさが童話風に映るのか、不思議である。

主人公の私は、この美しさに魅了されてか、あるいはその美しさをさらに深く体験したいというムシル独特の冒険心にかられてか、「夜だけは、だが黒みどり色の樹々の間を散歩した」。「だけは」と「だが」とに限定された散歩ではあるが、夜と死とにすっぽり暖かく包まれている状態を示すためだろう、「みどりの夜の鸚鵡たちの羽毛の間をゆくように」という、童話風な比喩がここでも使われる。

そして昼間、まわりの味方の砲列が狂ったように怒り始めた。青空は、白粉刷毛のパフでボンボンと軽くはたかれたように、榴散弾の白い小さな雲でまだらになる。敵機が飛んできたからだが、この飛行機にしても、童話風に美しく描かれている。主翼の下側は、イタリア国旗の三色に塗り分けられ、太陽がその下から上へ、また上から下へと透かして輝き、その赤白緑の透けて輝くさまは、「まるで熱帯の大鳥の羽毛のように (M_1)」、「まるで教会の窓越しのように (M_3)」と喩えられるのだ。まるで今にもどこからか歌でも聞こえてきそうな按配ではなかろうか。戦争に参加した最初の日の日記に、山の上に立ち、彼我の重砲の撃ち合う光景を見ている記述がある。彼はそれを見ながら、石合戦をしている少年たちを思い出すのだ。南チロルの戦争は、総じてムシルの目には、子供の石合戦程度にしか映らなかったとも取れ、また同時に、日常生活の束縛から解放されて、小鳥のように自由になり、自らも幼い頃にたちかえり、見るもの聞くものが、童話風に映るようになったのかもしれない。

『一兵士が語る』

M ₁	M ₂
……次の瞬間私は静かに歌うのを耳にした。射撃音ではなかった。奴は矢を投げ落としたのだ、と私は考えた。 だが私は驚いてはおらず、むしろますますうっとりとしていた。他の者たちが何も聞いていないのが、不思議であった。	……次の瞬間私は静かに歌うのを耳にした。「奴は矢を投げ落としたのだ」と、私は考えた。なぜなら射撃音ではなかったからだ。 だが私は驚いてはおらず、むしろますますうっとりとしていた。誰も何かを聞きつけていないのが、不思議であった。それで私は、声は消えるのだろうと考えた。だが消えはしなかった。声が私に近づき、次第に大きくなると同時に、だが何かが私の中で声に向かって立ち昇ってゆくようだった。生の光が。同様に果てしなく。(ein Lebenstrahl. Ebenso unendlich.)
(I) はるか彼方の天空から、歌は近づいてきた。それは、高くてもか細い歌う声だった。長く、とても長く私は声が近づいてくるのを耳にしていた。	というのも、私だけが音の近づくのを聞いている間、時間が長く、とても長くかかったからだ。それは、コップの縁がさすられて出す音のように、高くてもか細い、単純な歌う声だった。だがそれには非現実的なところ(etwas Unwirkliches)があり、従って叙述しがたい。「聞いたことのない声だ」と、私はひとりごちた。「それにまたすぐさま聞こえなくなるぞ」と。私は神を重んじたことはなかった。そしてそれを誇りにしていた。だが今、すぐにそれと気づいたわけではないが、神がもし何かをお告げになろうとすれば、こうなのだと、いつしかそんな思いに見舞われていたにちがいがなかった。その思いはあった。
(II) 〔ここで言っておかねばならないが、私は無神論者で通してきた。〕——M₁に鉛筆での追記。	(etwas Unwirkliches)があり、従って叙述しがたい。「聞いたことのない声だ」と、私はひとりごちた。「それにまたすぐさま聞こえなくなるぞ」と。私は神を重んじたことはなかった。そしてそれを誇りにしていた。だが今、すぐにそれと気づいたわけではないが、神がもし何かをお告げになろうとすれば、こうなのだと、いつしかそんな思いに見舞われていたにちがいがなかった。その思いはあった。
(III) 声は具体的になり、強まり、威嚇的になってきた。 私は身動きできなかった。だが音楽性を失ってはいなかった。私はそれを待ち受けた。私は自問した、警告を発すべきではないか、われわれはモグラのように、被いの下に四散すべきではなかろうか、と。だがたとえ他の者に命中しようとも、私はそうしたくはなかった。私は頑固に体験にしがみついていた。 すると彼らにも空気が鳴り始めた。たぶん不	私は身動きできなかった。声は私に向かっていった。私はそれを待ち受けた。声は具体的になり、強まり、威嚇的になってきた。私は自問した、警告を発すべきではないか、われわれはモグラのように、被いの下へ四散すべきではなかろうか、と。だがたとえ私が誰かに命中しようとも、私はそうしたくはなかった。 すると彼らにも空気が鳴り始めた。たぶん不

安が彼らの顔か目先だけを掠めたかもしれない。だが今となっては私には分らない。私の知っていることは、歌が突如音に、この世の音になってしまい、そして途絶えたということだ。私たちのいるまん中で、私のすぐま近で、何かが黙りこみ、そして大地に吸いこまれた。皆は突然知った、飛箭だと。私たちは探そうとしたが、鉛筆ほどの太さの飛箭は、たぶん地下 3 m の深さに突きささっていたのだろう。(死の)(天国の)歌が直接私の耳元で碎けて完全な無音状態になったとき、

(IV)

両足は踏んばって動いていなかったが、本能 (der Instinkt) が私の体を脇へさっと寄せていた。そのため上体は半弧を描いて、深いお辞儀をしていた。私は、興奮 (ein Rausch) から、およそ理解できない情熱から、目覚めるかのようにして身を起こした。

私の心臓は、鼓動を一つでも早めることなしに、全く静かに働いていた。脈搏も早まっていた。私は驚いてはおらず、感動していた。

熱い血潮の感情が満ち溢れ、全身が紅潮していたと、私は信ずる。当時の私は、冷水浴後にマッサージを受けて暖くなるときのようだった。真に肉体的に至福の状態。そして深いところで、個人的な聖別を受けて。

安が彼らの顔を掠めて、それで私の考えを了解したことに、私は気づいていたかもしれない。だが今となっては私には分らない。私の知っていることは、私たちの頭上 10 m, 100 m のところで、歌が突如この世の音になってしまい、そして途絶えたということだ。私たちのいるまん中で、私のすぐま近で、何かが黙りこみ、そして大地に吸いこまれ、碎けて非現実的な無音状態になった。私は、皆が見るとも知らずに私を見つめているのに、気づいた。数ヶ月後、担架にのせられて駅から私が運び出されたときに、女たちが私を見つめたのと同じ眼差しで。私の体は、両足はふんばって動いていなかったが、脇へさっと寄せられていた。そのため上体は半弧を描いて、深いお辞儀をしていた。今はじめて私は、興奮 (ein Rausch) から目覚めるのを感じた。どのぐらい長くこのようにすうっと滑り落ちて (sich entgleiten) いたのか、私は知らない。私は体を伸ばした。だが

私の心臓は、夕空をゆくカラスの羽ばたきのように、のびやかに静かに鼓動していた。私は一秒の何分の一の間も、身の縮む思いなどしていなかった。「飛箭だ」と、一人が言った。「もし当たれば、頭から足の裏まで突き抜ける」と。皆は飛箭を探そうとした。だが大工用の鉛筆ほどの太さの飛箭は、地中何 m もの深さに突きささっていた。私はそれらの声を憎み、ひそかに敵を愛していた。

熱い血潮の感情が満ち溢れ、全身が紅潮していたと、私は信ずる。

(V)

両稿の空白部分 (I) ~ (V) を比較すれば、ムシルが第三稿で何を入れ、何を削除したかがかなり分明になる。

M₁ で、彼の体験を実に正直に書き残したものと推察されるアムビヴァレントな表現、「(死の) (天国の) 歌が」が、M₃ では削除されている。だがその代りに、(I) の「だが何か私の中で声に向かって立ち昇ってゆくようだった。生の光が。同様に果てしなく」が入ったのだと、私は考える。これは、体験内容を明らかにするために、ただ創作的に入れたものではなく、実体験を回想して追加されたものに違いない。死を告げる上からの飛箭のかすかな音に、足を踏んばりぐっと堪えるようにして対応しながらも、これが幻聴ではなく、彼だけが選ばれて聞く天国の歌と信じ、神のお告げの場合もこうだろうと、そんな思いがふと掠めたとき、ぐっと堪えていたムシルの腹の底から、沸きかえるように「生の光」が太々と、上からのものを迎え撃ち、迎え入れるようにして迸り出たのだと、私は考える。こうして死生、自他の分別の境が消えうせ、不安、恐怖、驚愕といったマイナス感情は全くうせ、善なる「別の状態」にすうっと滑り落ちる (sich entgleiten)⁽³¹⁾ 神秘体験を、ムシルはより正確に再現し得たと思ったのではなかろうか。もっとも当時のムシルは、まだ「別の状態」という言葉は使っていない。1920 年以降、ムシルは、自分が体験した「ヴァレリー体験」や、この飛箭体験のような神秘的瞬間的状态を、2000 年以上にわたる東洋・西洋の神秘思想家たちの、ウニオ・ミスティカ体験の語録を集めた、M. ブーバーの『法悦の告白集』⁽³²⁾ (1909 年) や、この告白集の内容を心理学的に分析した K. ギルゲンゾーンの『宗教体験の心の構成』⁽³³⁾ (1921 年) を読み、古来の神秘思想家たちのウニオ・ミスティカ体験の状態と、同質のものであることを確認して、神なき時代の神秘思想家として、この状態を「別の状態」と名づけるに至るのである。

さて、「生の光が。同様に果てしなく」を入れることにより、M₃ で体験がより正確に再現され得たと私は言ったが、(II) の追加箇所が示すように、たとえ歌う声をコップのたてる音に喩えて、現実性を付与しても、これはあくまでも近似的比喻であり、この声には当然「非現実なところがあるから、叙述しがたい」と、正直に断わらざるを得ない。だが叙述しがたいのは、声ばかりでなく、飛箭体験全体がそうなのだ。世界が突然深まる状態なのだし、詩人の目が逆転する体験なのだから。もし中世の神秘思想家が戦場でこのような体験をしたら、大天使が光る剣を握って舞い下りてきたと、表現すれば足りたかもしれない。だが現代にはそういうトポスはない。しかし M₃ の「生の光」がさっと立ち昇るという表現や、M₁, M₃ の最後にある「熱い血潮の感情が満ち溢れ、全身が紅潮していた」という表現などは、A. ダイガーの指摘するように、当時のムシルはそれを知らなかったはずだが、古来の神秘家たちの告白に類似したものが多く見られるのである。⁽³⁴⁾

(V) で、 M_1 部分が削除されたのは、 M_3 では「本能」という言葉が削られ、一方「神のお告げ」という表現などが導入されていることから推察できるように、なるべく肉体的にこの体験を表現するのを避けて、精神性を表に出す処置だと考えられる。

(IV) で、「数ヶ月後、担架にのせられて駅から私が運び出されたときに、女たちが私を見つめたのと同じ眼差しで」が、突然追加されたことでは、次の事情が考えられる。すでに二度触れたように、『一兵士が語る』を書いていた頃、ムシルは、戦場を舞台とした別の作品『死の歌。歌っている死』(以下、 M_4 と記す)を手掛けており、その中で主人公(画家)の兵士は、敵弾で倒れ、傷病兵として貨物車で後方に運ばれる。そしてこれとは別の無題の草稿(M_5 と記す)では、この重傷病兵を護送する貨車内の描写が中心となり、列車がブラハに到着して終っている。従って、(IV)の突然の追加は、これとの関連でなされたものとも考えられる。A. ダイガーは、ローマにあったムシルの遺稿を調査して、当時ムシルは、これらの草稿を纏めて一作品にするつもりであったとし、まず M_4 から始めて M_3 、そして M_5 と続けるつもりであったと推測している。むろんまだ草稿の段階であり、また別々に書かれたものであるから、 M_3 と M_4 、 M_5 の間には、これらをそのまま結びつけるとしたら矛盾がある。だがこの矛盾を構わずに空想すれば、明暗の対照がくっきりと出た作品像を思い描くことができる。

南チロルの戦闘は、先述したように、詩人ムシルにとって、「ここでは死が歌っている。歌っている死」と総括されて、それが彼の日常の通奏低音となっていた。 M_4 では、これが表題となり、まさに主役となって砲声、銃声となって歌いまくり、主人公はその中に身を晒している。彼は冒頭で「懷疑を愛し、大胆な不信仰を好んでいた」と紹介されるが、これは無神論者である M_1 、 M_3 の主人公と同じ精神的系譜にあることを証明している。彼は大战勃発のときに、「他の人たちと同様に、奇妙な、宗教的なものに近い興奮」に見舞われる。そして予備役将校として部隊とともにガリチアに赴く。砲火を浴びて軍用列車から下りると、聞くもに射ちまわってくるその方向を目指して、歯を喰いしばって前進し、そして退却し、兵を集めてはまた前進するという白兵戦を繰り返す。この戦場における人間の営みには、もっぱら獣の比喩が使われている。主人公は「森の獣のように」見えぬ砲弾、小銃弾を耳で聞き分けることを覚える。銃弾を太ももに受けて倒れて戦場に置き捨てられると、遅れをとった馬が仲間に向かっていなくなような憧憬を抱いて、戦友が戻ってくるのを希求する。だが足音だけは近づいてくるが、また遠ざかる。そして味方と敵とが、倒れている彼の頭

越して撃ち合い、「彼は噛りかけのパンのように、両者の間に横たわり、両者によって捨てられた」恰好で、逃げることも身を守ることもしない状態にある。「名状しがたい孤独感と屈辱感とで身も凍るばかりであった」。

そして意識を失い、それが戻ったときには、彼は足に包帯を巻いて、鉄道の貨物車で後方に運ばれている。「列車が人間的な温かみのある方角へ目下彼を運んでいることを、彼は知ってはいたが、孤独感と屈辱感とは、意識を失っていたときでも、彼から離れなかった」。ムシルは、このような激戦に参加して負傷するという経験はなかったが、飛箭体験のほぼ半年後、烈しい口内炎を煩い、ブルネック、インスブルック、そしてブラハの病院へ護送された。この貨車で護送の体験は日記にも綴られているが、A. ダイガーの推定通りに、もし M_4 の次に M_3 が続くとするれば、八日もかかってブラハに護送されたその貨車の中で、 M_4 の主人公が、いわば M_3 の主人公になり代って、彼が以前南チロルの戦線で体験した飛箭の出来事を、同乗の傷病兵たちに回想的に物語ることになるのだろう。

M_1 では、「(死の)(天国の)歌」というふうに併記されていたものが、 M_3 では「死の歌」を削除されて、いわば「天国の歌」となって、主人公に舞い降りてきた。だが M_4 では再び「死の歌」が表題となり、主題となって、主人公はそれに撃たれて倒れ、他の傷病兵と同様に今護送される身の上である。こうして小説は、まず北のガリチア地方の埃くさい平野での悲惨な戦争体験を叙する。そしてそのあとで、主人公に南チロルの明るくて、どこか童話風の戦争の体験を、回想して物語らせる。大胆な不信仰を愛してきた主人公に、彼自身にも合点がゆかぬといふからせつつ、その神秘的な飛箭体験を物語らせる。この鮮やかな対照は天と地の相違だから、読者に強い印象を与えるのではなからうか。だが『黒つぐみ』で、話し手の A_2 が話した飛箭の話、聞き手の A_1 が理解しなかったように、聞き手の傷病者たちも、主人公のこの神秘的な話に理解を示したかどうかわからない。 M_5 で、重傷者たちは、列車が駅で長停車をするたびに、痛さに襲われた者が唸りだす。すると、第二、第三の者も唸りだし、こうして貨車全体の者が唸り、吠え、わめきだして、四壁がために震えだすほどになる。彼らがそうするのは、こうして互いに痛さを分かち合うためでもあるが、息を引きとり駅でおろされてゆく仲間がいるのを知り、自分が生きている証を示すために、獣のように唸っているのである。主人公は、自分の痛さは大したものでもなかったが、時折彼らに唱和している自分を発見する。「獣以下に突き落とされた者たち」のこの狂おしい友愛 (die Brüderschaft) に心を奪われ、これまで見たこともなかった、この苦痛の共同体 (die Gemeinschaft der Qualen) が彼を興奮 (berauschen)

させたので、いっしょになって叫んだのだ。主人公が物語った飛箭体験での、神との「共同体」(eine Gemeinschaft) による澄んだ興奮 (ein Rausch) と、この「苦痛の共同体」による狂おしい興奮とは、ここでも対照的なものとなって、読者に強い印象を与えるのではなかろうか。そしてこの二つは、またムシルのいう戦争における「実存の問題の露呈」を示す両極端の好例ともなる。

ムシルは、彼の作品で人間のさまざまな情熱の型を露呈させる。『特性のない男』は、その実験室または標本室の観があるが、この架空のムシルの作品で、主人公が「軽くかすんだ頭の中で、途方もない舞踊のようだ」と体験している、「苦痛の共同体」による狂おしい興奮状態と、神秘思想の伝統にある清澄な興奮状態とを分けて、前者を「別の状態」のマイナス・ヴァリアンテと呼んでいる。もっとも「別の状態」も、不信の念を抱かれて、教会により「妄想」とみなされてきたし、現代でも宗教人さえも、これに「精神錯乱」のレッテルを貼る用意のあることを知っているが。⁽³⁸⁾

新版のムシル全集 9 巻および日記 2 巻を調べた限りでは、この M₄, M₃, M₅ を纏めて一作品にする試みは、まず見当たらない。ただムシルは戦後になって、二部からなる大小説を計画⁽³⁹⁾しており、その第一部は、オーストリアにおけるセルビアへの部分的な出兵まで、そして第二部は、第一次大戦勃発以後と時代を分けて設定し、その計画内容を見ると、ムシル自身の戦争中の体験が主になっていることがわかる。そしてこの第二部で、無政府主義者の主人公は、まず M₄, M₅ におけるように、「……ガリチアで負傷、傷病兵輸送列車」, M₃ におけるように「1915 年春にはチロル。……テナで飛箭など、病気……」というように、長々と筋書は続いている。つまり、大小説の中の一シーンとして、M₄, M₅, そして M₃ をムシルは使おうとしていることがわかる。だがこの計画も、多くの彼の計画同様に殆んど計画倒れに終わっている。ムシルの戦中体験で、まさしく戦争の体験として作品化されたのは M₃ の飛箭体験だけで、日記に書きとめられた他のさまざまな体験のあるものは、平和時を背景にした短篇『グリーンジャ』か、または中世の戦国時代に時代を移した『ポルトガルの女』の中で使われている。M₄ は、戦争らしい戦争を描いたものだが、ムシル自身の体験に基づくものであったためもあるが、M₅ とともについに作品として日の目を見なかった。

本稿は「研究ノート」として書き始めたが、その枚数を遥かに越え、さりとて「論説」として再度練りなおす余力と日時を欠くままに、かく提出

することとなった。中途半端で、我ながらふがいなし、と思っている。

注

略号の GW は, Robert Musil: Gesammelte Werke, in 9 Bänden herausgegeben von Adolf Frisé, Rowohlt 1978. TB I, TB II は, Robert Musil: Tagebücher, herausgegeben von Adolf Frisé, Rowohlt 1976 の上巻, 下巻を示す。

1. この書き出しの文章は, Marie-Louise Roth: Robert Musil, Ethik und Ästhetik, List 1972 の 96 ページあたりの文章を自分流儀にアレンジして引用したもの。
2. R・ムシルの「ヴァレリー体験」, 一橋論叢, 第79巻, 第2号, 37~58 ページ。なおこれを書いた頃は, 新版のムシル全集9巻を手にしていなかったため, 気づかなかったが, 全集の第5巻, 1636~1638 ページに, Valerie がいるのを発見した。S₉ テキスト中のものだが, ここではウルリッヒの前身のアンダースが騎兵大尉の妻 Valerie に大いなる恋を抱き, そして島ならぬ山に行き, ウルリッヒの島での体験と同様の体験をしている。したがって拙論の 54 ページの最後の想定は, あながち狂ってはいなかったので安心した。
3. GW 3, S. 746~771. 『特性のない男』の第三部の, この 11 章「聖なる会話, 始り」, 12 章「聖なる会話, 波乱にとんだ継続」の二章は, 「別の状態」の内容説明に, ウルリッヒがやっきになっているところで, 実に興味深い。特に本稿のこの箇所を説明しているところは, S. 766~767 を参照されたい。
4. Robert Musil: Der deutsche Mensch als Symptom, Rowohlt 1967, S. 63~64
5. TB II S. 997 なお, GW 7 S. 752 では, ein froheres Ereignis となっているが, 根拠不明。
6. GW 3 S. 764
7. 久野昭著『神なき時代の神秘思想』, 南窓社, 昭和 51 年の 45 ページからの孫引き。
8. Anette Daigger: Die Amsel. Untersuchung der Genese der Texte und ihrer Varianten, Saarbrücken 1974
9. R. Musil: Tagebücher, herausgegeben von Adolf Frisé, Rowohlt 1976
10. GW 7 S. 757 または TB I S. 339
11. "Europäertum, Krieg, Deutschen" (September 1914), GW 8 S. 1022
12. TB I S. 544
13. TB I S. 544
14. TB I S. 309
15. Robert Musil, Leben, Werk, Wirkung, Rowohlt 1960 中の Karl Dinklage: Musils Herkunft und Lebensgeschichte の 225~233 ページ参照。
16. TB I S. 324
17. GW 8 S. 1343~1344
18. "Die Nation als Ideal und als Wirklichkeit" (Dezember 1921), GW 8 S. 1071
19. GW 7 S. 554
20. TB I S. 305
21. TB I S. 347
22. TB I S. 312

23. 「共同体」, 「合一」, 「一致」に対するムシルの懼れは、とくに大戦後、ムシルがいつくしみ育てる夢想のふたご、あるいはふたごのようによく似ていると互いに認め合う妹、あるいは姉のアガーテと、主人公ウルリッヒの共同生活で、実験的、冒険的に実現されてゆく。「別の状態」内での明るく澄んだ愛の合一の形で。だが結局はこの二人の合一も、「兄妹の星座 または 分けられないが、一つになれぬ者たち」(Das Sternbild der Geschwister Oder Die Ungetrennten und Nichtvereinten) という、比喻と厳密さを兼ね備えた美しい言葉に集約されることとなる。GW 4 S. 1337
24. GW 9 S. 1465
25. TB II S. 997~998 または GW 7 S. 751~753
26. TB II S. 1000 または GW 7 S. 754
27. TB II S. 1000~1001 または GW 7 S. 755~756
28. TB II S. 999 または GW 7 S. 753 の Der Laut 以下。
29. 「大いなる出来事のために創られた」は、後から鉛筆で加筆されたもの。なお、「大いなる出来事」に関しては、注(5)も参照されたし。
30. TB I S. 303
31. sich entgleiten を「すうっと滑り落ちる」と訳したのは、(7)の上掲書で、久野昭氏が「フィヒテの目」との関連で、そう訳されているのを借用した。氏は、このドイツ語の動詞を、また道元の「自己の身心、および他己の身心をして脱落せしむる」の「脱落」と関連づけ、『脱落』には『解脱』という意味も含まれているだろうが、ニュアンスとしては、すうっとぬけ落ちる、すべり落ちる(Entgleiten)ということだろう。自己も他者もすうっとすべり落ちてしまっ、自己本来のありかたに戻っていく、それが自己を忘れることだが、その自己を忘れることがとりもなおさず自己をなろうことだ」と言っている。M₃の場合は、日常的な自分からすうっと滑り落ちて、ムシルのいう「別の状態」に、知らぬ間に入っている状態を示している。このような状態を示すために、この動詞がドイツ語で伝統的に使われていたか、それを調べるのは興味深いことと思われる。
32. Martin Buber: Ekstatische Konfessionen, Jena 1909
33. Karl Girgensohn: Der seelische Aufbau des religiösen Erlebens. Eine religionspsychologische Untersuchung auf experimenteller Grundlage, Leipzig 1921 S. 584~629
34. たとえば, Sofia von Klingnau は、彼女の体験を、“……sah ich, daß ein Licht vom Himmel kam, das war unermeßlich schön und wonnig,……Und es dünkte mich, daß ein Glanz von mir ausging, der die ganze Welt erleuchtete,……” Girgensohn の上掲書 S. 587. また “Einige Augenblick danach fühlte ich plötzlich eine große Wärme, die mir das Herz erfaßte und sich in meinem ganzen Körper ausbreitete.” 同書 S. 597
35. TB II S. 1008 1010 または GW 7 S. 757~759
36. TB II S. 1015 1017 または GW 7 S. 759~761
37. Daigger の上掲書 S. 51~52
38. GW 3 S. 766
39. TB I S. 338~339